

才揮顔得り謹而机こ小呈素墨

陳ちん小生事昨年の四月余兄の辞ことりて

上京じやうの本郷ほん区く駒込こまご文ぶん醜しう入い寺てら出で

同どう年ねんの九月くわ今いま区く龍岡りゆう町ちやう京きやう華わ中ちゆう寺てら出で

轉てん校がうの勤きん勉めん中ちゆうふりしが生せいの縁えん者しや

二人にに死し亡じやうせしまりては今いま年ねんの暑しゆ中ちゆう休きゆう

暇あまをも郷きやうにかへりて面おもて出でりしもも為ならばいふき

心こころ組ぐみの慶うら鬼き角かく勉めん強きやうのため遂ついに小こ

其その志しをも得えぶりしが其その後のち阿あ兄にい三さん月げつ

試し験けん休きゆうにかへりて是こゝ水みづ帰かへりて面おもて出でりて為なるべし

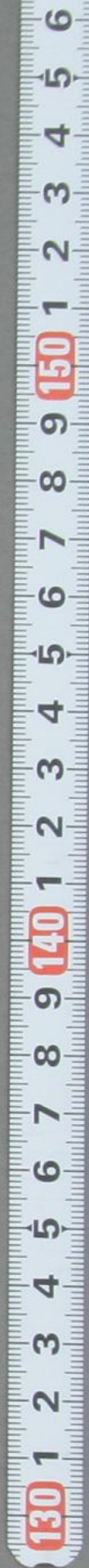
又また昔むかし屢しばしばにかへりて言こと越こせし故ゆゑ生せいもも何なに気き

無なく

三月さんの廿にじゅう五ご午後ご三さん時じの直ちゆう行ぎやう小こて

歸かへ道みち登のぼりて仙せん甘かん堂だうの招まね島しま小こ五ご寄ぎ

廿七日にじゅう里り小こ着ちやくしし今いま月げつの末すえ又また四し月げつの



病道登り仙臺の松島小五郎

廿七日里小着し今月の末又四月の

初の再京の豫定小唯此少の

自荷物を持つし帰郷せし小

空謀らん小金兄先年前より

故時不品行小巨多の金と其是没れ
つありし事

生の歸る四廿日前家人の為め奈覺

せられ為め小家内大凡波を
起す

親戚の為め漸々勢没せしが却而

生金兄の故時のため作遺憾勉

強中止の様小勢居の身とありしが

其後再三兄上京の事を請し小

許され此遂小志を得ん空しく

悲怨の中小一生を終らんかと愁勢の

我身唯金兄の賤劣す所為なひ

不品行を快み懐噴慨膽の情堪ぬ

都小ある友より勤孝再京の是れ

未小毎小涙兩眼小字い身振撃
せられ

聲振ふ然れども如何ん也再京の

都にあある友より勤孝再京の意
未ら毎に涙を兩眼に字に身振撃
せうれ

聲振ふ然れも如何ん也再京の
好機をかりしき此度或人の進めを
縣廳に出で身習しつてあり

此機を利用し來月一日頃

出校し後大孝若して他の專

門に學校に入り學ぶ百敗百折を

最初の志を屈せ也例令舎兄

再い心に入れおも願は勤勉

以而世に出出る事に決心を各
論を孝資の兄より送られる心算

此等の閣下慈仁の志に生の不幸に
誓しる事情を保持察被遊

解裕以知生の文字資と隣に給まん

若し保不都合をもら煩勞之
後

恐入重く他に求心当の所

求周旋の程幾重に希ふ
あり

二仲生上京出れば金足必に生を尋ね

上京出るにあらんに生願固たる決心を
以

之が歸郷を勤むるを拒む事は重く

陸中国岩手郡厨川村土淵

北野四於八番戸

廿一年八月廿七日

大坪長兵衛



以而世不出也事小決心在每
編孝賢の兄より送られざる心集く

此輩之に閣下慈仁の決心生の不事不
勢ゆる事情を以推察被遊
解裕以知生の文字賢を隣み給ま
か

若しは不都合もよく水煩勞之
後ハ

恐へまへも他ハ決心當の所
ありハ
水周旋の程幾重なる存ふ

二伸生上京出れハ金兌必出生を尋ね

上京出らる人ハ生頑固たる決心と
思て

之が帰郷を勤むるを拒む事ハ至

陸中国岩手郡厨川村土瀬

北野四十八番戸

廿一年八月廿七日 大坪長兵衛

午後三時投函

内閣總理大臣

伯爵大隈重信公閣下



東京市麹町区永田町
 内閣總理大臣官邸
 伯爵大隈重信公閣下
 親展



和

岩手縣岩手郡

厨川村郡上刺北野四八

大坪長兵衛

八月廿七日發

